

【註釈】

『日知錄集釋』註釈〔第四回〕下

宮内保  
玉城要

昔、魏文帝曹丕は、「文人相ひ軽んず」るのが古来の習いであることを、自身の体験を通じて熟知しながら、なお「文章は経国の大業にして、云云」と断言した。「文人」たちが、それぞれに己が文才に対する自信と懷疑とに思い悩みつつ、しかも孜孜として思索と操觚の工夫を重ねる時、やがて後世に伝わる文章を残すに違いない、と確信していたからである。果たせるかな、彼は、いわゆる建安七子の中からただ一人、『中論』をものし得た徐幹のことを「一家の言を成し」た者と認知したのだった。

今、顧炎武の、文章に寄せる期待はもちろん曹丕のそれと相い通じる。前条（文須有益於天下）においては、文章は何よりも経術と密接たるべきであることが力説された。本条（文不貴多）では、前条を踏まえて、経世致用を旨とし天下・後世に伝播されるに足る文章の出現が希求される。この時、文章は寡作たるべし、と顧炎武は主張する。

キーワード（ただし〔第四回〕上と共通） 明道救人、経世済民、益天下後世、崇重経術、文有枝葉

卷十九 第二条 文不貴多（〓著作は多きを貴しとせざるの事）

【本文・原注とその古語訳（〓訓読）】

① 二漢文人、所著絶少、史於其傳末每云、所著凡若

干篇、惟董仲舒至百三十篇、而其餘不過五六十篇、或十數篇、或三四篇、史之錄其數、蓋稱之、非少之也、乃今人著作、則以多爲富、夫多則必不能工、即工亦不皆有用於世、其不傳宜矣。

二漢の文人、著はす所絶えて少なく、史（伝）、

其の伝末にて毎に云ふ、著はす所凡そ若十篇なり、と。惟董仲舒のみ百三十篇に至りて、其の余は五六十篇に過ぎず。或ひは十数篇、或ひは三四篇なるのみ。

史の其の数を録するや、蓋し之を称ふるにて、之を少むるには非なるなり。乃ち今人著作しては、則ち多きを以て富と為す。

夫れ多ければ、則ち必ずや工なること能はず。即ひ工なりとても、亦た必ずしも皆は世に有用ならざるなり。其の(後世に)伝はらざるも宣なるかな。

② 西京尚辭賦、故漢書藝文志所載止詩賦二家、其諸有名文人、陸賈賦止三篇、賈誼賦止七篇、枚乘賦止九篇、司馬相如賦止二十九篇、兒寬賦止二篇、司馬遷賦止八篇、王褒賦止十六篇、揚雄賦止十二篇、而最多者、則淮南王賦八十二篇、枚臯賦百二十篇、而于枚臯傳云、臯爲文疾、受詔輒成、故所賦者多、司馬相如善爲文而遲、故所作少、而善於臯、臯賦辭中自言、爲賦不如相如、其文馱馱曲隨其事、皆得其意、

頗詼笑、不甚閑靡、凡可讀者、不二十篇、其尤嫚戲不可讀者、尚數十篇、是辭賦多而不必善也、東漢多碑誄書序論難之文、又其時崇重經術、復多訓詁、凡傳中錄其篇數者、四十九人、其中多者、如曹褒・應劭・劉陶・蔡邕・荀爽・王逸各百餘篇、少者、廬植六篇、黃香五篇、劉陶餘・崔烈・曹衆・曹朔各四篇、桓彬三篇、而於鄭玄傳云、玄依論語作鄭志八篇、所注諸經百餘萬言、通人頗譏其繁、是解經多而不必善也。

西京(Ⅱ前漢)辭賦を尚ぶ。故に『漢書』芸文志の載する所、詩賦の二家に止まりて、其の諸もの名有る文人(のうち)、陸賈は賦三篇に止まり、賈誼は賦七篇に止まり、枚乘は賦九篇に止まり、司馬相如は賦二十九篇に止まり、兒寬は賦二篇に止まり、司馬遷は賦八篇に止まり、王褒は賦十六篇に止まり、揚雄は賦十二篇に止まりて、最も多き者則ち淮南王の賦八十二篇、枚臯の賦百二十篇なり。而れば(『漢書』)枚臯伝に云く、臯は文を爲ること疾く、詔を受けるや輒ち成る。故に賦する所多し。司馬相如は善く文を為れども遅し。故に

為る所少なし。而れども臯より善し、と。

臯が賦中に自ら言へるあり、賦を為ること相如に如かず、其の文馱骸なれども曲らかに其の事に随ひて、皆な其の意を得たり。頗る詼笑するも甚だしくは閑靡せず。凡そ読む可き者、二十篇ならずして、其の尤も慢戯にして読む可からざる者尚ほ数十篇あり、と。是く辞賦（の文）多くして必ずしも善からざるなり。

東漢（Ⅱ後漢）、碑誄書序論難の文多し。又た其の時経術を崇重すれば、復た訓詁（の文）多し。凡そ（史）伝中に其の篇数を録する者四十九人あり。其の中多き者は、曹褒・應劭・劉陶・蔡邕・荀爽・王逸らの如き各百余篇、少なき者は、盧植の六篇、黄香の五篇、劉駒駘・崔烈・曹衆・曹朔らの各四篇、桓彬の三篇なり。

而して（Ⅱ後漢書）鄭玄伝に云く、（鄭）玄、論語に依りて鄭志八篇を作り、諸経に注する所百余万言なるを、通人、其の繁なるを頗る譏れり、と。是く解経（の文）多くして必ずしも善からざるなり。

③ 秦延君説堯典、篇目兩字之説、十餘萬言、但説曰

若稽古三萬言、此顔之推家訓所謂鄴下諺云、博士買驢、書券三紙未有驢字者也、文以少而盛、以多而衰、以二漢言之、東都之文多於西京、而文衰矣、以三代言之、春秋以降之文、多於六經、而文衰矣、記曰、天下無道、則言有枝葉。

秦延君、堯典を説くに、篇目兩字の説に、十余万言あり、但だ曰若稽古を説きて、三万言あり。此れ顔之推が家訓に謂ふ所の、鄴下の諺に云はく、博士驢を買ひて、書券三紙なるに未だ驢の字有らず、となる者なり。

文は以て少なければ而ち盛り、以て多ければ而ち衰ふ。二漢を以て之を言へば、東都の文、西京よりも多し、而して文衰へたり。三代を以て之を言へば、春秋以降の文、六經よりも多し、而して文衰へたり。記に曰く、天下に道無ければ、則ち言に枝葉有り、と。

〈原注〉

1、桓譚新論

桓譚の新論にみゆ。

2、陸游詩、文辭博士書驢券、職事參軍判馬曹。

陸游の(「讀書」)詩に、文辭博士驢券を書し、職事參軍馬曹を判ず、とあり。

3、如惠施五車、其書竟無一篇傳者。

惠施が五車の如き、其の書竟に一篇の伝はる者として無し。

4、隋志載古人文集、西京惟劉向六卷、揚雄、劉歆各五卷、爲至多矣、他不過一卷二卷、而江左梁簡文帝至八十五卷、元帝至五十二卷、沈約至一百一卷、所謂雖多亦奚以爲。

隋(書經籍)志、古人の文集を載するに、西京は惟だ劉向の六卷、揚雄・劉歆の各五卷をのみ至多と爲せり。他は一卷二卷に過ぎざるのみ。而るを江左にては梁の簡文帝は八十五卷に至り、元帝は五十二卷に至り、沈約は一百一卷に至れり。所謂る、多しと雖も亦た奚ぞ以為ひん、なるのみ。

【集釋とその古語訳(一)訓詁】

1、楊氏曰、今之文集與今之時藝、若不拉雜摧燒、將伊于何底。

楊(寧)氏曰く、今の文集と今の時芸と、若し拉雜摧燒せざれば、將た伊れ于きて何にか底らんとする、と。

2、沈氏曰、救文格論、于此下有北海王睦、臨邑侯子駒駘、馮衍、曹褒、鄭玄、賈逵、班彪、班固、朱穆、胡廣、應奉、應邵、崔駰、崔瑗、崔實、崔烈、楊修、劉陶、張衡、馬融、蔡邕、荀爽、荀悅、李固、延篤、盧植、皇甫規、張奐、孔融、杜篤、王隆、夏恭、夏侯、曹叡、劉珍、葛翼、王逸、崔琦、邊韶、張升、趙壹、侯瑾、張超、班昭、共凡一百十字。

沈(彤)氏曰く、

救文格論、此の下に北海の王睦、臨邑の侯子、駒駘、馮衍、曹褒、鄭玄、賈逵、班彪、班固、朱穆、胡廣、應奉、應劭、崔駰、崔瑗、崔實、崔烈、楊脩、劉陶、張衡、馬融、蔡邕、荀爽、

荀悦、李固、延篤、盧植、皇甫規、張奐、孔融、杜篤、王隆、夏恭、夏牙、傅毅、黃香、劉毅、李尤、李勝、蘇順、曹衆、曹朔、劉珍、葛璽、王逸、崔琦、邊韶、張升、趙壹、侯瑾、張超、班昭ら(全五十一人の名)共に凡そ一百十文字有り、と。

3、楊氏曰、惠施多方、其書五車、非必皆其自作<sup>博</sup>

楊氏曰く、惠施多方にして、其の書五車なるも、必ずしも皆な其の自作には非るなり、と。

4、趙氏曰、梁武帝作通史六百卷、金海三十卷、制旨

孝經、周易、毛詩、尚書、春秋、中庸、孔子正言等講疏二百餘卷、吉凶軍寶嘉五禮一千餘卷、贊序詔詰等文一百二十卷、佛經義記數百卷、金策三十卷。

簡文帝讓昭明太子傳五卷、諸王傳三十卷、禮大義二十卷、老子義二十卷、莊子義二十卷、長春義記一百卷、法寶連璧三百卷。

元帝著孝德忠臣傳各三十卷、丹陽尹傳十卷、注漢書一百十五卷、周易講十卷、內典博要百卷、連山三十卷、詞林三十卷、玉韜、金樓子、補闕子各十卷、

老子疏四卷、懷舊傳二卷、古今同姓名錄一卷、式贊三卷、文集五十卷。此帝王著述之最富者也。

晉葛稚川著書六百餘卷。

宋樂史著貢舉事二十卷、登科記三十卷、題解二十卷、唐登科文選五十卷、孝弟錄二十卷、廣孝傳五十卷、總仙記一百四十卷、太平寰宇記二百卷、總記傳坐知天下記四十卷、商頌雜錄二十卷、廣卓異記二十卷、諸仙傳二十五卷。

宋齊邱文傳十三卷、杏園集十卷、李白別集十卷、

神仙宮殿窟宅記十卷、掌上華夷圖一卷、又編己作爲仙洞集百卷。

周必大著書八十一種、又有平園集二百卷、李心傳有高宗繫年錄二百卷、學易編五卷、誦詩訓五卷、春秋考十三卷、禮二十三卷、讀史考十二卷、舊文證誤十五卷、朝野雜記四十卷、道命錄五卷、西陲秦定錄九十卷、辨南遷錄一卷、詩文一百卷、

李燾作長編九百七十八卷、總目五卷、易學五卷、春秋學十卷、五經傳授、尚書百篇圖、大傳雜說各一卷、七十二子名籍各一卷、文集五十卷、奏議三十卷、四朝史稿五十卷、通論十卷、南北通守錄三十卷、七

十二侯圖、陶潛新傳、并詩譜各三卷、歷代宰相年表、唐宰相譜、江左方鎮年表、晋司馬氏本支、宋齊梁本支、王謝世表、五代將相年表、合爲四十一卷、

王應麟有深寧集一百卷、玉堂類稿二十三卷、掖垣類稿二十二卷、詩考五卷、地理考五卷、漢藝文志考證十卷、通鑑地理考一百卷、通鑑地理通釋十六卷、通鑑答問四卷、困學紀聞二十卷、蒙訓七十卷、集解踐阼篇、補注急就篇六卷、補注玉齋篇、小學紺珠十卷、玉海二百卷、詞學指南四卷、詞覺題苑四十卷、筆海四十卷、姓氏急就篇六卷、漢制考四卷、六經天文六卷、小學諷詠四卷、

此文人著述之最富者也。

趙氏曰く、

梁の武帝、通史六百卷・金海三十卷を作り、  
孝經・周易・毛詩・尚書・春秋・中庸・孔子正言などの講疏二百余卷、吉凶軍賓嘉五礼一千余卷、贊序詔誥などの文一百二十卷、佛經義記數百卷、金策三十卷を制旨す。

簡文帝、昭明太子伝五卷、諸王伝三十卷、礼

大義二十卷、老子義二十卷、莊子義二十卷、長春義記一百卷、法宝連璧三百卷を撰す。

元帝、孝德忠臣伝各三十卷、丹陽尹伝十卷、注漢書一百十五卷、周易講十卷、内典博要百卷、連山三十卷、詞林三十卷、玉韜・金樓子・補闕子各十卷、老子疏四卷、懷旧伝二卷、古今同姓名録一卷、式贊三卷、文集五十卷を著す。此れ帝王著述の最も富おほき者なり。

晋の葛稚川、書六百余卷を著はす。

宋の樂史、貢舉事二十卷、登科記三十卷、題解二十卷、唐登科文選五十卷、孝弟録二十卷、広孝伝五十卷、繪仙記一百四十卷、太平寰宇記二百卷、總記伝坐知天下記四十卷、商頌雜録二十卷、広卓異記二十卷、諸仙伝二十五卷を著はす。

宋齊邱に文伝十三卷、杏園集十卷、李白別集十卷、神仙宮殿窟宅記十卷、掌上華夷図一卷あり、又た己が作を編みて仙洞集百卷と爲す。

周必大、書八十一種を著はし、又た平園集一百卷、李心伝有高宗繫年録二百卷、学易編五卷、

誦詩訓五卷、春秋考十三卷、禮二十三卷、読史考十二卷、旧聞証誤十五卷、朝野雜記四十卷、道命録五卷、西陲泰定録九十卷、弁南遷録一卷、詩文一百卷有り。

李燾、長編九百七十八卷、総目五卷、易学五卷、春秋学五卷、五経伝授・尚書百篇図・大伝雜説各一卷、七十二子名籍各一卷、文集五十卷、奏議三十卷、四朝史稿五十卷、通論十卷、南北通守録三十卷、七十二候図・陶潛新伝・并詩譜各三卷を作り、歴代宰相年表・唐宰相譜・江左方鎮年表・晋司馬氏本文・宋齊梁本文・王謝世表・五代将相年表などを合はせて四十一巻と為す。

王應麟に深寧集一百卷、玉堂類稿二十三卷、掖垣類稿二十二卷、詩考五卷、地理考五卷、漢芸文志考証十卷、通鑑地理考一百卷、通鑑地理通釈十六卷、通鑑答問四卷、困学紀聞二十卷、蒙訓七十卷、集解踐祚篇、補注急就篇六卷、補注玉会篇・小学紺珠十卷、玉海二百卷、詞学指南四卷、詞学題苑四十卷、筆海四十卷、姓氏急

就篇六卷、漢制考四卷、六経天文六卷、小学韻詠四卷有り。

此れ文人著述の最も富き者なり、と。

【註釈者による補注】

1、二漢文人 表面上は前漢の董仲舒以下、後漢の王睦以下を指しながら、実はいわゆる唐宋八大家および前明の王学の徒・古文辞派の面々のことを強く意識した措辞である。顧炎武の詩文には「文人」の語が頻出する。この『日知録』にも「文人之多」「文人模倣之病」「文人求古之病」などといった標題が認められるが、それら「文人」は総じて否定的なニュアンスを佩びている。今、そのやや露骨な例として「與人書十八」(『亭林文集』巻四)を引けば、「宋史言、劉忠肅每戒子弟曰、士當以器識爲先、一命爲文人、無足觀矣、僕自一讀此言、便絶應酬文字、所以養其器識而不墮於文人也(『宋史に劉忠肅公(劉摯)がつねに子弟を戒めて言われた言葉が載っております；士たる者は人格と見識を高めることを

第一にしなければならぬ。仮にも文人などと呼ばれてしまったが最後、まともな相手にはならない、と。私（顧炎武）はこれを読んで、きっぱりと交際のための詩文を作るとを止めました。お陰で人格・識見を養うことができ、文人などに墮落しないで済んでいます」と臆面もない「文人」否定である。のみならず、この書翰の末尾にはつぎのような文言がつづく、「韓文公起八代之衰、若但作原道・原毀・諍臣論・平淮西碑・張中丞傳後序諸篇、而一切名狀、概爲謝絶、則誠近代之泰山北斗矣、今猶未許也」と。韓愈は偉大な「文人」ではあったけれども、結局、優れた「士」であったとは言いがたい、と言うのであって、これは大胆かつ激烈の議論と言わなければならぬ。もっとも、顧炎武のこの発言は、あるいは王守仁『傳習錄』にもとづくかも知れない。すなわち、同書の第十一条に「愛問文中子韓退之、先生曰、退之文人之雄耳、文中子賢儒也、後人徒以文詞之故、推尊退之、其實退之去文中子遠甚」と言うのが、あるいは顧炎武の拠り所であったかも知れない。

2、史於其傳末每云　ここに「史」と言うのは、蓋し兩「漢書」を指すのであるが、ただし范曄『後漢書』がいわゆる美文盛行の機運の中での産物であること、この正史がいわゆる「文苑伝」を立てた始めであることなど、を忘れてはなるまい。

3、今人著作、則以多爲富　明末清初の頃の人が言う「今人」とは、普通、北宋以降の人々を指すが、ここでは、より直截的に前明の「文人」たち、すなわち前後七子（いわゆる古文辞派）の面々とその信奉者たち、公安派・竟陵派の面々とその信奉者たち、並びに王学の口給者たち、を指すであろう。

その「今人」の代表的な人物であった李贄、この顧炎武が最も嫌った人物のうちの一人（『日知録』通行本巻十八参照）、が述べた言はあまりに名高い；「天下之至文、未有不出於童心焉者也、苟童心常存、則道理不行、聞見不立、無時不文、無人不文、無一樣創制體格文字而非文者」（『焚書』卷三「童心説」）。いわゆる「童心」をもって各人が自由闊達に発言するのこそ「至文」を生む所以なのだ、と言うのである。



る。だが、顧炎武の文章観は、李贄のような奔放さ  
と真っ向から対立する。

4、不二十篇 『漢書』枚臯伝の記述では「百二十篇」  
に作る。このあたり、単純なる誤写と見過して宜し  
いか否か。何らかの恣意が働いていそうな感じが  
しないでもないのだが。

5、通人頗譏其繁、是解經多而不必善也「通人頗譏其  
繁」は『後漢書』卷三十五、鄭玄伝に見える語で、  
「是解經多而不必善也」なる顧炎武の語と合わせる  
と、(鄭玄の文章も)「通人」からはしばしば煩瑣  
であるとして非難されたのであって、「通人」たち  
に係ると、経典解釈の文章など、多く著述されたと  
ころで、それらが優れているということにはならな  
い、というわけである」といった所だが、本条に引  
用されたこの語(「通人頗譏其繁」)は、原文におけ  
る場合との間に、微妙なニュアンスの違いを感じさ  
せる。すなわち——「門人相與撰玄答諸弟子問五經、  
依論語作鄭志八篇、凡玄所注周易尚書毛詩儀禮禮記

孝經尚書大傳中候乾象歷、又著天文七政論魯禮魯禮  
禘祫義六藝論毛詩譜駁許慎五經異義答臨孝存周禮難  
凡百餘萬言、玄質於辭訓、通人頗譏其繁、至於經傳  
治執、稱爲純儒、齊魯間宗之(「門人たちは語らい  
あって、弟子たちの五經に関する質問への鄭玄の回  
答を集め、『論語』ふうの『鄭志』八篇を編纂した。  
鄭玄が注釈を加えた凡ては、『周易』『尚書』……  
……など凡て百余万言の著書をものしている。  
彼(鄭玄)は、言辞の解釈に嚴格であったから、通人  
からしきりに(文章が)煩瑣だと非難されたが、経  
学に博く通じている所から、「純儒」と称えられ、  
齊魯(＝山東)のあたりでは経学の宗家とみなされ  
た」というのが引用文を含む前後の原文であって、  
ここの「通人頗譏其繁」には、鄭玄の業績への非難  
や否定的見解などむろん含まれてはいない。本条で  
も鄭玄を否定しているわけではないが、さりとて全  
幅に讚美しているわけでもない。

蓋し顧炎武は鄭玄傳の「論曰」に見える范曄の  
「鄭王父豫章君每考先儒經訓、而長於玄、……」、

及傳授生徒、並專以鄭氏家法云（『先考豫章君（范寧）は、昔の儒者の經書解釈を比較衡量したうえで、鄭玄が優れているとし、……学生に授業するでさえ、鄭玄の所説ばかり採用していた』）といった言い種に刺激されて、たとえば後年の皮錫瑞が「漢學至鄭君而集大成、於是鄭學行數百年、宋學至朱子而集大成、於是朱學行數百年」（『經學歷史』九經學積衰時代）と言ったのと同様の、ある種の感慨をもったのでなからうか。すなわち「鄭學」「朱學」のアナロジーとしての「王學」、この、顧炎武が最も唾棄した一派のことがこのとき想起されたとしても何ら不自然ではない。

とまれ、顧炎武のかような、いわば恣意的な引用は他処にも散見される所であり、それらはしばしば後学による經学研究に少なからぬ影響を与えている。さしずめ本条などは、『經學歷史』五、經學中衰時代の鄭玄評価に微妙に影響しているように思われるが、如何であろうか。

## 6、秦延君堯典……三万言 秦延君とは秦恭のこと。

張山拊らとともに、小夏侯すなわち夏侯建の門下生で、師の家法たる『尚書』学を祖述し、師の遺説を百万言にまで敷衍したこと有名。「説堯典」二云々は、『漢書』藝文志とその顔師古注に見える語である。言う、「後世經傳既已乖離博學者又不多聞闕疑之義、而務碎義逃難、便辭巧說、破壞形體、說五字之文、至於三萬言（『後世、經と伝とが離れ乖いてしまうと、博学の士までが「多く聞きて疑わしきを欠く」（『論語』為政）の精神を失い、くだくだしい解釈をすることで、人から非難されるのを避けようと努め、上手い言い回しを振りかざして表現様式を崩してしまうといったありさまで、たかだか五字ばかりの文を説くのに、三万言を費すまでになった」と。そうして、ここへの顔師古注に、「言其煩妄也、桓譚新論云、秦近君能説堯典、篇目兩子之說、至十餘萬言、但説曰若稽古、三萬言」と言う。

秦延君恭のような人物の存在は、前漢末から後漢にかけて、すなわち皮錫瑞の所謂「漢学が鄭学へと集大成されていく」過程で、枚挙に暇ないほどに認められるのだが、それもこれも「經傳既已乖離、博

学者又不思多聞闕疑之義」(補注5参照)ことに因る、  
というのが、蓋し顧炎武の解釈なのであり、主張な  
のであろう。

7、顔之推……鄴下諺 『顔氏家訓』勉學第八に收め  
られた話柄(笑話)である。言う、「如此諸賢、故  
爲上品、以外率多田里閑人、音辭鄙陋、風操蚩拙、  
相與專固、無所堪能、問一言輒酬數百、責其指歸、  
或無要會、鄴下諺云、博士買驢、書券三紙、未有驢  
字、使汝以此爲師、令人氣塞」(近頃、鄴の京に  
集まる学者先生たちのうち)これらの賢者たちはも  
ともと洗練された第一級の人物だけれど、片や大抵  
の連中ときた日には、田舎育ちの閑人で、言葉遣い  
も粗野なら、立ち居振る舞いにも無頓着。申し合わ  
せたように独りよがりの頑固者。これといった取り  
柄もないときている。(この手合いにかぎって、こっ  
ちが)一言でも質問しようものなら、待ってました  
とばかりに、百万言を返してよこす。要点を問いた  
だしたところで、決まって不得要領だ。だから鄴下  
には諺ができていて、学者が驢馬を買う時にゃ、

約定手形をながなが書いたとて、驢馬のろの字の言  
いださぬ”などとやっている。(わが子よ孫たち  
よ)お前らはこのての先生を家庭教師にでも択んだ  
が最後、生気を抜かれる羽目になるだろう)」と。  
北魏鮮卑族の流れをくむ王朝北齊の王城鄴都で、  
漢代以来の経術に憑かれた士人・貴族たちが、日常  
的に繰り返す愚行の教数。南朝梁の洗練された貴族  
文化の中で生いたった顔之推の眼に、この後進国家  
のインテリたちの言動は珍妙というのでは済まされ  
ないものがあつたに相違ない。この誠実な南方貴族  
が、日頃の生真面目さをかなぐり捨てて、北朝人士  
の生態を誇張し揶揄して描いた所に、彼の感情がと  
くと窺える。のみならず、その感情は引用者顧炎武  
の感情でもあるのだ。——六朝末期における、かく  
も深刻な知性の荒廃ぶり。それは、例えば秦廷君に  
見られたばかりかさや鄭玄による仰々しさ、そう  
した事態によってもたらされたのである、と。

8、文以少而盛、以多而衰 例えば『老子』通行本第  
五章の「多言數窮、不如守中」に河上公は「多事害

神、多言害身」と注する。多言・繁文への戒めであつて、われわれはすでに秦恭の例、鄭玄の例について見てきた。繁文に対する批判は王守仁『傳習録』にも認められる所で、「春秋以來、繁文益盛、天下益亂、始皇焚書、……………若當時志在明道、其諸反經叛理之説、悉取而焚之、亦正暗合刪述之意。自秦漢以來、文又日盛、若欲盡去之、斷不能去」云云と言う。これなども恐らくは顧炎武の深く共鳴した所だつたに違いない。

9、記曰……枝葉 『禮記』表記に「子曰、君子不以辭盡人、故天下有道、則行有枝葉、天下無道、則辭有枝葉（孔子の言われるよう、君子は、言葉だけで他人を知り尽せる、などとは考えない。それというのも、天下に道が行われている時、他人の行動には（樹木の幹から出る）枝葉のような飾り（雅美）が備わるものだし、天下に道が行われていない時、他人の言葉には枝葉のような飾り（虚言）がつきまとうものだからである）」とあり、この部分に鄭玄による次のような注釈が付されている。すなわち、

「行ひに枝葉有るは、徳を益す所以なり。言に枝葉有るは、是れ虚榮おほ衆おほきなり。枝葉は幹に依りて生じ、言行も亦た礼由り出づ」と鄭玄は解してみせる。かく見てくれば、顧炎武がこの文言を引いたことの意味は、すでに明白である。

10、桓譚新論 も二十九篇あつたのが佚われて、いま《四部備要》に琴道篇のみが收められており、その残卷に辛うじて「秦近君能說堯典篇目、兩字之説、至十餘萬言、但説曰若稽古三萬言」なる文字が見え、孫馮翼が「漢書注同上」と注するように、『漢書』卷三十藝文志の「説五字之文、至於二三萬言」の注記に「師古曰、言其煩妄言也、桓譚新論云、秦近君能說堯典、篇目兩字之説、至十萬言、但説曰若稽古三萬言」とあり、顧炎武の引用とは若干異なる。

11、陸游詩 『劍南詩稿』卷十八所収の「讀書」詩七律に言う、

束髮論交一世豪

暮年憔悴困蓬蒿

文辭博士書驢券

職事參軍判馬曹

病裏猶須看周易

醉中亦復讀離騷

若爲可奈功名念

試覓并州快剪刀

束髮より論交す一世の豪と

暮年には憔悴して蓬藁に困しむ

文辭は博士驢券を書し

職事は參軍馬曹を判つ

病裏猶ほ須く周易を看るべく

醉中亦た復た離騷を読む

若し功名の念を奈す可きと為さん

試みに并州快剪の刀を覓めよ

と。——早熟の神童などと誉めそやされた身が、今や往年の面影すらないまでに落魄してしまい、頓狂な行為ばかりを重ねている。それでも氣位だけは失わず、病気になるうが酔い痴れようが、習性となつた読書だけは欠かせなくて、今でも易経や楚辭に手を伸す。そんなにも功名への執着が断ち切れないの

なら、いっそ并州産の切れものでも探してバツサリやってみようがいい、と言うのである。（「并州快剪刀」の典故については今ふれない。）北方遊牧民の脅威も知らぬげに、また経世済民の使命も忘れて、ただ闇雲に仕宦・功名の夢を追ひ求めるこの士人は、『顔氏家訓』勉学に登場する人物そのままである。無慮六世紀を隔てた南北朝と南宋王朝と、だがあまりに酷似した両者の状況は、読者の敵愾心を煽り悲憤させるとともに、傍ら何やら絶望的ですからある。

かく、顧炎武自身によるこの注記が果たす効用は、まことに絶妙と言うほかない。

12、惠施五車 『莊子』天下篇に名家を代表した人物・惠施のことが詳細に載せてある。すなわち「惠施多方、其書五車、其道舛駁、其言也不中」云々と紹介され、やがて手厳しく批判されている。『荀子』非十二子篇においても論難を受けていること、すでに案内の如くである。まことに、例えば「聞一言以貫萬物、謂之知道、多言而不當、不如其寡也」(「一言

を耳にただけで万物に通じる、それでこそ道を理解しているというものである。しかしこれに反して、言葉をいくら重ねても的を射ることがないとなると、いっそ寡黙である方がよい」(『管子』戒第内言九) あるいは「心都子曰、大道以多岐亡羊、學者以多方喪生」(『列子』說符) というのが、顧炎武の年来の主張であり、惠施の「多言」の如きはまさに唾棄さるべきものであった。

13、所謂雖多亦奚以爲 『論語』子路の中の著名な一条「子曰、誦詩三百、授之以政、不達、云云」の末句を引くことで六朝の美文を、及びいわゆる竟陵体を、痛罵しているのである。「與人二十五」(『亭林文集』卷四) にも「君子之爲學、以明道也、以救世也、徒以詩文而已、所謂雕蟲篆刻、亦何益哉、某自五十以後、篤志經史、……………別著日知錄、……………以躋斯世於治古之隆、而未敢爲今人道也」(『君子による學問は、道を明めるための営為なのであり、世を救うための所業なのであります。ただ詩文を作るための學問なら、それは所詮いわゆる雕蟲篆刻つま

り言葉遊びをするための所為にすぎないのでありまして、いったい(世のために) 何ほど役立ちましようか。私は五十歳を越えてから、深く經学と史学とに傾倒するようになりまして、(それぞれの專著の外に) 『日知錄』をも著わし、……………(これらの諸著を) もってこの現実を古代の治世の隆盛にまで登りつかせようとするのでありまして、当今の人々のためだけの發言をしているではありません」

14、今之文集與今之時藝 個人のいわゆる專集と帖括文・八股文の模範文集をいう。明代は、商業資本の蓄積に因る、文芸大衆化の時代でもあった。それ故膨大な数量の個人專集が上梓されたことは、周知の事柄に属する。また、明末の李贄が「一代有一代之文章」として、たとえば八股文を以て「有明一代之文章」と見なした(『藏書』雜說)、などのことも文芸大衆化がもたらした事象に外ならない。

このような動向・状況に対して、例えば閻若璩は、「三百年文章學問不能直追配唐宋及元者、八股時文害之也」と言い、顧炎武もまた、「某君欲自刻其文

集以求名於世、此如人之失足而墜、若更爲之序、豈不猶之下石乎（『某君は、自身の文集を自費出版して世に名声を得ようとしています。しかしこれは、足を踏みはずして井戸に墜ちるようなもので、間違っています。もしこの上、その文集に序文を書いてやるとしたら、それこそ墜ちた人に石を投げてやるようなものではありませんか』）と言う（『亭林文集』巻四「與人書二十」。蓋し楊氏はこうした顧氏の言に斟酌したのであろう。

15、不拉雜摧燒、將伊于何底 時代の「文学」状況に対する顧炎武の嫌悪感を、楊寧なりに受け止めた、本条第一段へのいわば評語である。

「拉雜摧燒」は、元来、激しい憤りから物を粉々に碎き焼き捨てる行為で、古樂府「有所思」（樂府詩集）巻十六、鼓吹曲辞一所収）第二節に「聞君有他心、拉雜摧燒之。摧燒之、當風揚其灰。從今以往、勿復相思。相思與君絕（『聞く、君に他心有りと、拉雜して之を推き焼かん。之を推き焼きて、風に當て其の灰を揚げん。今従り以往は、復た相ひ思ふ勿

けん。相ひ思ふとも君とは絶たん』）と歌われている。が、ここでは、就中「拉雜」は、詩賦文章の字用事が乱雑雜駁で脈絡がないことの譬え、と解しておくのがよいであろう。蘇軾の「書拉雜變」なる序文（と言うよりも寧ろ戯文）に「司馬長卿作大人賦、武帝覽之、飄飄然有凌雲之氣。近時學者作拉雜變、便自謂長卿。長卿固不汝噴、但恐覽者渴睡落牀、難以凌霄耳」（『蘇軾文集』巻六十六）とあるうちの「拉雜變」などは、その例である。

「伊于何底」は『毛詩』小雅、節南山之什「小旻」第二章に「謀之不臧、則具是依。我視謀猶、伊于胡底（『之を臧からざるに謀り、則ち具に是れ依る。我れ猶を謀るを視るに、伊れ于きて胡にか底らんとする』）とあるのに由る。將來への見通しが立たない不安感、それを 表す語である。

16、救文格論 顧炎武の隨筆集の一つで、全一卷から成る。元来、呉震方編の紀行文集・隨筆文集たる『説鈴』（康熙四十四年、一七〇五年刊行）前集第六冊に『雜録』一卷とともに収録された。通行本『日知

録』の主として卷二十所収の数条が（「論史家之誤」「論古人不以甲子名歲」「論史家追紀日月法」「論古人必以日月繫年」「論史書一年而號」等々）重複する所から、これらの条々は『日知録』からの転載剽竊ではないかと疑われもしたが、すでに『四庫提要』が指摘しているように、『日知録』の印行以前からすでに別行されていた、と見るのが宜しい。すなわち、重複の紀事はむしろ『救文格論』から『日知録』へ転写されたもの、と見なすべきであろう。

17、非必皆自作 楊寧のこうした解釈が何に由来するのか未詳。あるいは、惠施のいわゆる「五車書」を、『呂覽』や『淮南子』と同種の、学術集団によって編纂された百科全書の一、と見なそうとする風潮が、楊寧の周辺にはあったのかも知れない。

それにしても、顧炎武は「惠施が五車の如き、其の書竟に一篇の伝はる者として無し」と、個人の氣質にまかせた多作を厳に戒め、暗に前明「文人」を諷していた。対するに楊寧のかかる発言は、せっかくの顧炎武の気負いを殺ぐ格好になった気味がある。

顧炎武の病的なまでの「文人」嫌悪に、楊寧としては、いささか水を差した積りなのであるうか。「自余所及見、里中二三十年來號爲文人者、無不以浮名苟得爲務（「余の眼が及ぶ所から言って、ここ二、三十年來、同郷の文人などと呼ばれている手太いので、浮名だの余祿だののことはかり気にかけていないものはない）」（「異同初行狀」文『亭林文集』卷五）というのが顧炎武いつもの口吻であった。

#### 【現代語訳】

#### 《本文》

① 前・後両漢の時代、文人たちは極めてわずかしか著作しなかったから、史書は伝記の末尾でつねに「著はず所凡て若干篇のみ」と紀している。（そうした中）董仲舒だけが百三十篇の多きに達しているだけで、その余の文人たちは五、六十篇、或いは十数篇、或いは三、四篇を伝えているにすぎない。

史書が文人たちの著作数を記録に留めているのは、賞賛してのことであって、少めんがためではなかつ



たはずである。だからこそ近人の場合、その数の多さを富とするのであろう。だが、ものごとは数が多くなると巧妙さを失うものであるし、たとい巧妙であったとしても皆がみな世に役立つとはかぎらない。後世に伝えられない道理である。

《集釋》

1、楊寧氏はこうまで言っている、今日の個人専集や八股文集は、取りまとめて打ち砕き焼き払ってしまわぬ限り、後の世がどうなるか不安でならない、と。

② 前漢では辞賦が重視された。それで『漢書』芸文史が載せるのは詩賦の二家に止まっている。(例えば)多くの著名な文人の中で、陸賈は賦が三篇、賈誼は賦が七篇、枚乗は賦が九篇、司馬相如は賦が二十九篇、倪寛は賦が二篇、司馬遷は賦が八篇、王褒は賦が十六篇、揚雄は賦が十二篇、といった具合であり、最も多い場合では淮南王が賦八十二篇、枚臯が賦百二十篇である。だが、『漢書』枚臯伝では

こう記されている；枚臯は、辞賦を作るのが速く詔を受けるとたちどころに完成させるふうだったから、作品が多かった。司馬相如は、巧みではあったものの、制作に時間がかかったから、作品の数は少ない。しかしながら、作品の質において枚臯のよりたち勝っている。枚臯自身その辞賦の中で次のように言っている；賦のときは相如に及ばないが、かく、辞賦は数量が多いからといって必ずしも好いわけではないのである。後漢の時代には碑誄・書序・論題といった文体が加わったうえに、また経術が尊重されて訓詁の文が多く作られるようになったから、『後漢書』の列伝中に著作数が記録されている者は四十九人にもなる。うち最も多いのは、曹夔・應劭・劉陶・蔡邕・荀爽・王逸らの各百篇であり、少ないのは盧植の六篇、黄香の五篇、劉駒駰・崔烈・曹衆・曹朔らの各四篇、桓彬の三篇といった具合である。それで『後漢書』鄭玄伝にも、「玄は『論語』に模して『鄭志』八篇を作り、諸経に百万言もの注記を施したが、通人はしばしばその煩雑さを詰った」と言っている。

かく、經書解釈の書は多いからといって、(それが)必ずしも優れた業績であるというわけではないのである。

《集釋》

2、沈彤氏によれば、顧炎武の『救文格論』一卷では「傳中録其篇數者(『後漢書』列伝中に著作数が記録されている者)」の後に北海の王睦・臨邑侯子の駒駟・(中略)張超・班昭ら五十一人の姓名一百十字が連ねられている、という。

③ (前漢の) 秦恭は、『書』の堯典を解釈するに当って、篇目(の堯典という)二字を解説するだけでに十余万言を費し、「曰若稽古」という四字を説くのに三万字を費した。これこそ顔之推の『家訓』に謂う所の歎下の諺、つまり博士が驢を買ったが領収書三枚の中に驢の字がひとつも出てこない、というのと同じである。

文章は少なければ(而)盛んになり、多ければ(而)衰えるもので、両漢を例としてこのことを言うなら、後漢の文は前漢より多いけれども、文章は

衰えている。三代を例として言うなら、春秋以降の文章は六経より多いが、文章は衰えている。それで『礼記』表記篇にも「この世に道が行われなくなると、人の言葉に虚飾ばかりが多くなる」と言っている。

《原注》

1、桓譚『新論』に(「秦近君が云云」と)記述されている。

2、陸游の「讀書」詩に「文辞の博士が驢券を書けば、職事の参軍が馬曹を判じる」とある。

3、『莊子』天下篇に見えている(惠施の著書は、車五台を要するほどだったというが、なんと一篇すら後生に伝わりはしなかった。

《集釋》

3、楊寧氏はこう言っている、惠施は(『莊子』天下篇では)多方面にわたる該博な知識の持ち主で、

車五台分もの著書をものした（が、その主張はちぐはぐで、その言説は的を射ていない）とされていくけれども、その（大量で統一を欠いた）著書のすべてが恵施の自作だったわけではない、と。

④ 『隋書』経籍志に古人の文集を載せられていて、前漢ではわずかに劉向の六卷、揚雄・劉歆の各五卷というのが最も多いもので、その余は一、二巻にすぎない。ところが南朝ともなると、梁の簡文帝は八十五卷、元帝は五十二卷、沈約は一百一卷といった具合で、いわゆる多きも亦た奚を以て為さんや、である。

### 《集釋》

3、省略（【集釋とその古語訳（Ⅱ訓読）】4、の古語訳を参照）

### 【追記】

魯迅の『且介亭雜文二集』に「文人相輕」と題する

短文七篇が収められている。すでに周知のように、いづれも一九三五年に書かれた、論争の文章である。論敵は数年来のいつもの顔ぶれのほか、旧友の林語堂や実弟の周作人までが新たに敵陣に加わったこともあって、なかなかの賑わいである。先生さぞや辟易してござらむと思いきや、それはどうやら杞憂というもののようで、相変らずの韜晦は避けがたい所ながら、至って悠然たる態のように見受けられる。これ、あるいは弱みを見せまいとする、魯迅一流のポーズなのかも知れないが。——何はともあれ、少なくとも『文選』巻四十五設論に採録された「二漢文人」たち、すなわち東方朔・揚雄・班固といった面々の場合とは違って、思い詰めた所がない。

一体、この国の文学史は「文人相輕」の歴史（それも、さほどの発展性も見出せない）である、と言って過言でないような所がある。その際「相輕」は、相手の全人格を「輕んじる」が如き非難・罵詈にまで及ぶのがしばしば、という傾向があるように見受けられる。なるほど『典論』論文の昔は、「文人が相手を輕ん」じたについて、「夫人善於自見、而文非一體、鮮能備

善、是以各以所長、相輕所短（「そもそも人は己を表現する才能をもってはいるものの、（表現するための）文体ジャンルとなると一体に止まらないから、すべての文体をこなせる人は少ないということになる。そこで人は、己の得手とする所でもって、他人の不得手な所を詰るようになる」といった事由があったかも知れない。だが、現に魯迅たちの「相輕」がそうであるように、時代を遡って、例えばあの蘇軾の「文字之衰、未有如今日者也、其源實出於王（介甫）氏、王氏之文未必不善也、而患在於好使人同己、自孔子不能使人同、顏淵之仁、子路之勇、不能以相移、而王氏欲以其學同天下、地之美者、同於生物、不同於生、惟荒瘠斥鹵之地、彌望皆黃茅白葦、此則王氏之同也」（『答張文潛縣丞』書：『東坡文集』卷四十九）の如きは、臆面もない悪罵としての「相輕」に外ならず、およそ論争などと言えた代物ではない。

ここに顧炎武による「文人」論の如きも、またそのような「文人相輕」の系譜に組み入れられてよいであろう。『墨子』に「古之聖王、欲傳其道於後世、是故書之竹帛、鏤之金石、傳遺後世子孫、欲後世子孫

法之也、聞先王之遺而不爲、是廢先王之傳也」（『貴義』第四十七）とあるのは周知の事柄に屬するが、顧炎武が「文人」たちに要求する「文」のありようは、正に墨子の所謂「先王之遺」「先王之傳」でその「文」を盈すこと以外ではないのであり、それは蘇軾における「王氏之同」そのものに外ならない。北宋の劉贇（補注1参照）もまたそうであり、明末の陳子龍とても同じことである（顧炎武は陳子龍の憤死を悼んで「哭陳太僕子龍」詩ほかを献じている）。かくてわれわれは、今しばらく「文人」論を追ってみなければなるまい。